

天金の書なれば紙魚も棲みよからん

藤田湘子

私の本棚に天金の書はあつただらうか。思い浮かばない。しかし、蔵書家の愛蔵本の中には美しい金色の天を持つ本がある。さわれば金のなめらかさが指先に伝わる。装丁そのものも美しく、皮の表紙に金の型押しが施され、手に取るだけで幸せな気分になる。

紙魚は体全体が銀白色の鱗片におおわれていて魚に似た形をしている。衣類の糊や和紙を食べ、薄暗いところに棲みつく。わが家の紙魚は逃げ足速く、すばしっこいわりに泰然自若としている。最も原始的な昆虫らしい。

そんな紙魚を見つけた時に、天金の書なれば居心地よく、美しい時を過すことが出来るだろう、と思った湘子の何と言うやさしき、そして美意識。

1686年 (558.05.19作) 第六句集『一個』 鑑賞・野本京